

高校生へ 私が選んだ1冊の本

「宇宙の謎に迫る！
中学生からわかる現代天文学」

島袋隼士：著
技術評論社

神奈川県
神奈川県立川崎北高等学校
遠井 陽向汰

私たちがふと夜空を見上げ、星のきらめきに「綺麗」と声を漏らすその刹那を形作っているのは、一体どのような異境のできごとなのだろうか。私は時々、そんな疑問を抱くことがある。普段当たり前前に視界の端に存在している宇宙の像は、時に私たちの意識の中に普遍的な景色ではなく、不可思議で神秘的な事象として現れる。

本書では、そんな宇宙のさまざまな事象について、宇宙論についての研究を進める天文学者、島袋隼氏が教えてくれる。本書の特徴は、なんとといっても扱う事柄の幅広さだろう。本書はChapter 1～8からなり、宇宙の観測、太陽と太陽系といった原理や知識に基づいた身近なトピックに加え、人類の宇宙観の歴史や、宇宙や星の始まりから終わりまでの、まさに時空を超えた宇宙の流れを知ることができる。

しかしながらここまで聞くと、本書は哲学的な話を詰め込んだお堅くて難しい本だと思った人もいるのではないだろうか。しかし、実際はそんなことはない。むしろ、本書はそういったことに関する知識が全く無い人にこそふさわしい本だと私は思う。

大前提として、本書の内容はとてつもなく壮大で、我々では到底想像もつかないようなものである。しかしながら本書では、そんな難題に自然と興味を持ち、理解を深めることができる。その理由は、著者の島袋氏が常に我々読者の目線に立ち、疑問や意見を言語化してくれているからである。また、私のように知識のない人ではイメージがつきにくい専門用語や数値などの情報が示された際も、比較や例え、前述された解説との結びつけなどによって簡単に理解ができるようになっている。他にも本書では全ての分野において、順に疑問を投げかけては一つ一つそれを紐解いていくという方法で解説を進めており、一度謎の答えを得ては新たな謎のもとへ誘われ、常に興味をそそられる。これらの工夫によって、本書ではどんなに難しい内容でも「気になる→分かった！」という感覚を確実に得ることができる。

さらに、本書の幅広いトピックや特徴の中でも特に私が面白いと感じた要素がある。それは、言うなれば「空想科学」の部分である。本書ではしばしば「もしも地

球がブラックホールになるとしたら？」や「宇宙の未来はどうなる？」など、興味深い疑問を投げかけてくる。そんな問の数々はその他のトピックとは違って実際には起こり得なかったり、明確なロジックが解明されていないものばかりだ。しかしながら筆者は、膨大な天文学の探求の歴史の中で生まれてきた結論や仮説を基にそんな未知の事象に対して答えやさまざまな可能性を示しており、より私たちの宇宙に対する好奇心を刺激し、想像の余白を残してくれている。

私は本書を読み、今まであまり気にしたことがなかった空の上の世界について興味を持ち、私たちが普段何気なく見聞きしている事象の正体や、今に至るまでの人類と天文学の進歩の歴史、宇宙や星々の成り立ちからこの先の未来に至るまでの移り変わりについてなど多くの知識を得ることができた。それと同時に、私たちの住む太陽系が宇宙の一部であることや人間の構成元素が宇宙から来ていることなどを知り、今まで雲の上の存在だと思っていた宇宙が常に自分の生活のそばにある身近な存在なのだと感じた。次に夜空を見上げたときには、全く新たな視点を持って目に映る事象に思いを馳せることができるだろう。

本書を読むことで、私のように宇宙に関する知識や興味を持たずに読み始めた人でも、我々と同じ目線に立って徐々に展開されていく形式の解説を通じて遠く離れた宇宙空間に踏み入れ、その謎と直接対面しているかのような没入感を体験することができる。さらに本書では全てのトピックに対して、天文学がどのようにアプローチしているかが明確に示されている。宇宙の謎の大きさとロジック、過去から現代にかけての解釈や解明度の変化を交えて理解することができるうえ、コラムの中では天文学の道に進むために役立つ知識が天文学者の著者によってわかりやすく述べられているため、天文学に強い興味を持っている人に対してもおすすめできる一冊となっている。宇宙や天文学に対して興味がある人もない人も、ふと空を見上げた時にその不可思議な事象に目を引かれた経験がある人は、ぜひこの探求と想像が詰まった一冊を読んでみてほしい。